

- 立山千草・本間信夫 (2009) : 地図化して認められる日本の食文化。地理月報, 513号, 二宮書店, pp.1-3およびp.18.
- 中尾佐助 (1972) : 『料理の起源』日本放送出版協会, pp.121-124.
- 星川清親 (2003) : 『改訂増補 栽培植物の起源と伝播』二宮書店, p.55.
- 松本忠久 (2008) : 『平安時代の納豆を味わう』丸善ブラネット, 317p.
- 松山 晃 (1996) : 『東南アジアの伝統食文化—その形成と系譜—』ドメス出版, pp.297-316.
- 鷺田清一 (2015) : 折々のことは8. 朝日新聞, 2015年4月8日号.

付 記

日本では「糸引き」は、それが足りないと生産者にクレームが来るほど重要な納豆の要素であるが、茨城県工業技術センターは糸引きの少ない変異菌を見出し、2014年4月に特許を申請した。これに基づき、最近、ネバネバを3分の1にした納豆が開発され、フランスへの輸出が始まった。混ぜても箸からぼろりと落ちる程度のネバネバしかないとのことである。独特の香りがするチーズを好み、発酵食品に対する抵抗感が少ないとみられるフランスが当座のターゲットだそうである(朝日新聞2015年2月12日夕刊)。

「和食」が*washoku*として世界に知られつつあるが、将来、納豆がヨーロッパに定着し、広まるのか、納豆に興味をもつ人びとには楽しく、また興味ある問題である。

(白坂 蕃)

山下琢巳著 : 『水害常襲地域の近世～近代—天竜川下流域の地域構造—』古今書院, 2015年1月刊, 277p., 6,400円(税別)

治水技術の未成熟な時代にあつて、河川の氾濫によってもたらされる水害を完全に克服することは困難であった。河川下流域に代表される水害常襲地域は水害によって生命や財産を脅かされる可能性が高く、居住条件的に「不利」な地域であるとみなされやすい。本書は天竜川下流域を対象として、そこに住む人々が水害を「前提」、あるい

は「考慮」した社会経済活動をいかに持続してきたのか、また近代的な土木技術の導入による水害減少により、そうした生活形態がいかに変容したのかを明らかにしたものである。

個人的なコメントになるが、評者の故郷は本書のフィールドに近い浜松であり、評者も小学校時代から郷土学習などを通して「天竜川の水害とその治水」というテーマには幾度となく接してきた。ただし、そこで教えられた内容は、常に水害に苦しめられる住民の姿と、私財を投じて治水事業に貢献したある篤志家の功績、その治水によって住民は水害に悩まされることはなくなりました、という単純化されたストーリーであったように記憶している。その後大学院に進学して著者の研究を知ることになったが、著者が描く地域像・民衆像は評者が把握していたステレオタイプな水害と治水のイメージとはかけ離れたものであり、水害をある意味で「活用」しながら生活を営んでいく民衆の姿に新鮮な驚きを感じたことをよく覚えてい

本書は著者・山下琢巳氏が2006年12月に筑波大学に提出した学位論文「近代における水害常襲地域の展開と構造—天竜川下流域を事例として—」をもとに新たな調査結果などを追加して再構成されたものであり、氏が卒論以降、天竜川下流域をフィールドとして続けてこられた研究の集大成といえる。

本書の構成は下記の通りである。

- 第1章 序論
- 第2章 天竜川下流域の水害史
- 第3章 水害頻発期における天竜川下流域の存立基盤
- 第4章 河川改修工事と天竜川下流域への影響
- 第5章 水害減少期における天竜川下流域の地域構造
- 第6章 天竜川下流域における地域構造

以下、本書の内容を評者なりに紹介してみたい。まず第1章では序論として、地理学や河川工学等の関連分野における先行研究が示され、本書の研究視点と研究方法が述べられる。

第2章では、精密に作成された年表に基づき、当該地域における水害史を概観している。著者はまず、天竜川流域では沖積平野の開発が本格的に進行した戦国末期から近世初期以降、頻繁に水害が発生し始めたことを示している。破堤被害地点は時代ごとに変遷しており、その要因は時期ごとに採用していた治水システムの影響によるものであった。一方、明治中期以降は、近代的な技術を導入した河川改修工事の成果によって、水害は相対的に減少したことが明らかになった。

第3章は、近世期を「水害頻発期」と位置づけ、この時期における当該地域の地域構造を考察したものである。著者はまず絵図や地籍図等を用いて村落景観と、水害時の状況や復旧の過程を集落単位で丹念に復原していく。当該地域では旧低水路に沿った洪水流の侵入や土砂の堆積によって被害が拡大しやすく、農業的には自然堤防上での畑作が重要であった。とくに綿の集約的な生産が主要な農業的基盤であり、水害からの防衛や水害後の復旧は自然堤防上の畑地を優先して行われてきた。

しかし水害頻発期にあって農業生産だけでは住民生活は不安定であり、これを補うための経済的基盤が不可欠であった。この点について、著者は水防組合の存在に着目する。水防組合は天竜川下流域を一つの単位として治水に対応させるために組織されたものであり、住民らは組合を通じて堤防の維持や破堤後の復旧・補強工事等に出演し、現金収入を得た。集約的農業と水害から還元される経済的利益とを組み合わせる生計を維持していく生活サイクルは、同様の自然条件を有した天竜川下流域全体に共通するものであり、これにより

水害頻発期においても社会経済活動が持続可能であったことが明らかにされた。

第4章では、近代的技術を導入した河川改修工事が行われた明治中期を水害減少期への過渡期ととらえ、従来の生活サイクルを変容させた要因としての河川改修工事を検討している。ここで重要なのは、この時期にも従来通り流域住民が工事に参加して経済的利益を得てはいたが、それは必ずしも水防組合員としての出演ではなくなっていたことである。工事には近代的技術に対応できる専門業者が進出し始めており、住民らは業者との「契約」によって工事に関わるようになっていった。村単位で堤防関連工事に関わらなくなるなど地域の状況が変容しつつあり、同時に水防組合の機能を変質し始めていた。

第5章は、上記の河川改修工事によって「水害減少期」に入った当該地域の地域構造を、集約的な農業生産と材木流通という二つの観点から考察している。水害の減少は農業生産の安定をもたらし、集約的農業による商品作物や野菜の生産が行われ、やがて当該地域はキュウリ・メロン等の栽培先進地としても発展した。また、東海道本線開通によって、天竜川を筏流しの輸送路とする中流域からの材木移出が活況を呈した。ここで著者は、筏流しの際に洪水など何らかの理由によって流出し、漂着する材木（流出材）に着目する。すなわち、流出材を拾得した沿岸住民に対して材木の所有者である材木商組合等から謝礼が支払われることから、これが住民の重要な現金収入になった。そのため住民らが天竜川の増水時に、争って川から流出材を引き上げる状況がみられたという。

こうした生産基盤の変容を通じ、著者は「同じ自然条件をもつ下流域全体」という従来の地域協同体制がしだいに分解し、栽培する農産物や農法、あるいは村落と天竜川との距離によって流出

材拾得が可能であるか否か、といった要素によって住民同士に新たな連帯が生まれていく過程を示している。さらに、こうした従来の生活システムの崩壊や水害そのものの減少によって、水防組合の弱体化と形骸化が進んだのであった。

第6章はこれらの考察結果をまとめ、天竜川下流域における地域構造とその変化について、著者の見解と今後の課題を述べている。

以上、私見を交えながら各章の内容をまとめた。まず特筆すべきことは、従来の水害常襲地域研究が「水害時」の状況を中心に検討してきたのに対し、本書は「水害常襲地域とは、このいつまで続くかわからない『平時』と、いつかは発生する『水害時』との両面を併せ持つ地域（1頁）」であるという根本的な地域認識に立ち、考察を進めている点である。水害常襲地域とはいえ1年中常に水害の危機にさらされているわけではない。そのため本書では、平時の地域構成要素を含めた分析を行うことにより、水害時と平時とを繰り返す水害常襲地域における暮らしの総体をとらえることが可能になっている。

こうした視点から、絵図や地籍図、古文書など多様な資料を丹念に検討することによって、当該地域に「平時」の集約的農業と「水害時」に堤防工事等から還元される経済的利益という二つの軸が存在し、そのどちらもが住民の生活に不可欠であったことを導き出した第3章は特に読み応えがある。「平時」において高度に集約化された綿作を営みつつ、いざ水害に襲われれば「少々堤防が破損した方が、普請の機会が増えて村が潤う（250頁）」という指摘からは、水害を自明のものともみなし、いざとなればそれを糧として生きる住民らの、したたかといっても良い暮らしのあり方を読み取ることができる。

また、先行研究では比較的検討されてこなかった「水害減少期」の地域変容を取り上げている点

も本書における特色の一つである。著者は水害の減少を「より長期にわたる平時」の獲得ととらえることにより、地域の「近代化」を明らかにした。著者は当該地域の近代化を分析する際、農業とともに材木流送の際に発生する流出材拾得を取り上げている。流出材の問題は一見すると取るに足らないものとして見過ごされがちであるが、著者による検討により、実際にはそれが天竜川流域住民にとって不可欠な収入源となり、さらにはかつて「天竜川下流域」として連帯していた地域のあり方を解体し、新たな秩序を立ち上げていく要因の一つとなったことが明らかになった。従来、材木流通研究においてもさほど重要視されてこなかった流出材への着目は、著者のオリジナルな視点として高く評価されるべきである。橋の上から流出材を「モリで突き上げ」たり、減水する前から危険を顧みず舟で「中洲に乗り付け、材木を収集していた（223頁）」住民もあったというが、こうした記述からは流出材拾得という事象を通じた住民らの生き生きとした生活の有様が迫力をもって伝わってくる。

本書が著者による長年にわたる地道なフィールドワークと、絵図・地図類や地誌、多様な公的・私的文書の堅実な分析の成果であることは疑いない。しかし、本書における最大の功績は、こうした膨大な資料分析を着実に積み重ねた上で、氾濫する河川と対峙し、時にそれを活用して生きてきた住民生活の諸相を活写することに成功した点にある。前述した流出材への着目も、ミクロな視点から住民の生活を拾い上げようとする著者の細やかな研究姿勢なくしては有り得なかったであろう。評者も歴史地理学という手法を用いて「過去の人々がいかに生きたのか」を明らかにしたいと考える1人である。こうした立場から歴史地理学を学ぼうとする者にとって、歴史地理学分野で培われてきた手法を駆使しながら、人々の生活のあ

り方を鮮烈に描いた本書は大いに参考とすべき1冊である。

(加藤 晴美)

菊地俊夫・有馬貴之編：『自然ツーリズム学（よくわかる観光学2）』朝倉書店、2015年2月刊、175p., 2,800円（税別）

本書は、朝倉書店から刊行されている「よくわかる観光学」シリーズ内の1冊であり、刊行済みの『観光経営学』（岡本伸之編、2013）に次いで上梓された。今後は『文化ツーリズム学』の発行が待たれる。

本書『自然ツーリズム学』の書名にある、自然ツーリズムとはどのようなものか、疑問を抱く人も多いであろう。これまでに日本で刊行された、自然地域におけるツーリズム現象に関する書物では、主に「自然観光」という語が用いられ、また説明がなされてきたと思われる。本書の1章は、「自然観光」とは「自然」を見るという行為に重きがおかれた用語であると指摘する。一方、「自然ツーリズム」はnature-based tourismの和訳とされ、「自然」を感じることでできる目的地へと移動すること、さらに移動の間に生じる一連の行動すべてを指す。つまり、自然ツーリズムは自然観光を包含したより広い意味をもっている。日本人のみならず世界中で、人びとの観光行動が多様化している。この点でも自然観光という語で、現在の「自然地域における観光（またはツーリズム）」を説明できない。それゆえに、現在、「自然ツーリズム」なる語の一般化が求められ、本書の出版は時宜にかなったものであろう。

本書では、「自然」の捉え方についてもある程度明確にしている。すなわち、自然を人間の手入れの有無によって捉えるよりも、視覚的に生物や

土、水を感じられるかどうかという点を重視しているのである。このように本書で用いる基本的な用語の意味を明確にした後、目次にはない分類ではあるが、基礎編、実践編、応用編へと内容が進行していく。

基礎編では、自然ツーリズム学に係わる理学的学問分野の基本的視点が解説される。具体的な分野としては、地理学（2章）、生態学（3章）、土壌学（4章）、情報学（理学と工学の双方の視点をもつ5章）がとりあげられている。それぞれに関して、学問的な視点が説明された後に、持続的な自然ツーリズムを実現するために、どのような点が重要であるかが述べられている。章によっては、自然ツーリズムに関する事例の紹介もあり、内容を理解する助けになっている。

実践編は、自然ツーリズムの実態や諸特徴について、「見方・考え方」を説明している。取り上げられているのは、エコツーリズム（6章）、ルーラルツーリズム（7章）、ジオツーリズム（8章）、世界遺産・国立公園におけるツーリズム（9章）、都市域におけるツーリズム（10章）である。6章と9章では、制度面からみた自然環境保全の説明に重点がおかれている。一方、残りの章では具体的な地域事例の説明が丁寧になされており、理解が深まる。

応用編では、自然ツーリズム学の社会的意義を考慮し、複数のトピックに関して研究者による提起がなされている。トピックとしては、オーバークース（11章）、災害とリスク管理（12章）、地域計画や地域づくりへの貢献（13章）、環境教育（14章）、目的地での管理運営計画（15章）がある。いずれのトピックも、自然ツーリズムを扱うさまざまな研究分野における、重要な研究視点とみることもできる。

最終章（16章）では、自然ツーリズムの先進地とされるニュージーランドの事例が紹介され